

# 客室乗務員に見る化粧の可能性 ——接近と距離化のスキルという観点から——

Possibility of Cosmetic Activity to Consider from Cabin Crews:  
A Viewpoint of Approaching/Distancing Skills

枝川 碧  
Aoi EDAGAWA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

## 要 約

本研究は旅客機の客室乗務員が施す化粧には、規定に沿って化粧を行う（規範）、行いたくない（自由、個人の考え）という二つの領域を行ったり来たりする以上の意味があるということを経験と距離化の概念から考察する。通説では、社会は女性に美を追求するように仕向けるとされている。吉澤（1997 = 2013）は、客室乗務員が、「『美』をめぐる基準」（ibid.:191）のトップに位置していると考えられる。これに対し、女性の主体性を重視する見方もある。以上の議論とは異なり、化粧を行うことは、接近と距離化のスキルであると捉えることで、化粧を分析する。

本論文では、二名の客室乗務員のインタビューを分析対象としている。対象者のうちの一人はサポートをする存在としての自分、もう一人は人命にも関わる仕事をしているという責任感を持った自分として、個々の役割を捉えていることなども考察し、吉澤の言う「基準」を絶対視しない生き方についても考える。

## Abstract

In this paper, I demonstrate the significance of makeup activity by airline cabin crews which is included in neither freedom nor conforming to norms for makeup. As a common theory, there is a tendency for society to make women pursue beauty. Yoshizawa (1997 = 2013) believes that the cabin crews are located at the top of “standard of beauty” (ibid.:191). On the other hand, there is a view that emphasizes women's subjectivity. Differing from the above arguments, I analyze makeup from the viewpoint of the approaching/distancing skills based on interviews with two female cabin crews. The interviewees recognized their fundamental social roles; one stated that she takes the role to support others and the other stated that she takes the role to protect human lives. These statements lead to the conclusion that cabin crews distance themselves from the “standard” proposed by Yoshizawa.

[注]

1) 本稿で対象とするのは旅客機で仕事を行う客室乗務員である。以降は「客室乗務員」と表記する。

[文献]

吉澤夏子, 1997年(2013年POD版) 『女であることの希望—ラディカル・フェミニズムの向こう側—』勁草書房。